

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：34437

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K22200

研究課題名（和文）戦後ドイツの教育課程論の史的展開 教育課程を正当化する根拠に注目して

研究課題名（英文）On the Justification of Curriculum: Historical Analysis of Curriculum Theories
in Postwar West Germany

研究代表者

市川 和也（ICHIKAWA, Kazuya）

大阪成蹊大学・教育学部・講師

研究者番号：10880148

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では戦後西ドイツにおけるカリキュラム理論において、カリキュラムの正当化がどのように行われてきたかを学説史にもとづいて検討した。60,70年代の西ドイツはディルタイ由来の精神科学を前身にもちながら、経験科学や批判理論など、多種多様な理論を背景に持つカリキュラム理論が打ち出され、カリキュラム開発実践の基盤となった。本研究はこうした西ドイツ独自の発展を遂げた60,70年代のカリキュラム研究の基盤にあるヴェーニガーのレーアプラン理論を検討し、彼の研究が以後のカリキュラム研究の出発点となったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本のカリキュラム論はPISA以来、コンピテンシー等に代表されるように、身につけるべき資質・能力をベースに内容の選択が論じられる傾向にある。しかし、カリキュラムの論じられ方は各国によっても異なり、本研究が取り上げるドイツにおいてはBildungなど、日本や英米とは異なる概念がカリキュラムの中心に置かれてきた。そうしたドイツのカリキュラム研究を、それが根差す思想・哲学を鑑みながら検討することによって、主に英米に依拠してきた日本のカリキュラム研究の正当化の論理を相対化し、別様のカリキュラム像を示唆したい。

研究成果の概要（英文）：This research examines how curriculum theories in postwar West Germany have been justified. Curriculum theories in West Germany, as in other countries, were developed in the 1960s and 1970s and played a significant role as the basis for curriculum development in schools. This research examined Erich Weniger's Lehrplan theory as the foundation of curriculum research in the 1960s and 1970s, which developed uniquely in West Germany. This research clarified that his research became the starting point for curriculum research in the following decades.

研究分野：カリキュラム研究

キーワード：カリキュラム研究 教育課程研究 教授学 ドイツ 教育学 教育方法学

1. 研究開始当初の背景

あるカリキュラムが正当なものとされる際に根拠となる理論枠組みはその地域の伝統によって異なる。アメリカではカリキュラム研究の成果に立脚してカリキュラムが検討されるのに対し、本研究が対象とする西ドイツでは伝統的に教授学がカリキュラム研究において主たる位置を占めていた。教授学と英米のカリキュラム研究を比較した「教授学、カリキュラム研究に出会う」プロジェクトの研究においては、教授学では人間形成や全人的発達を志向する陶冶(Bildung)を重視する一方で、20世紀初頭以降のアメリカカリキュラム研究では「どの知識が最も価値があるか」という問いが心理学の影響を受けながら探究されたことが報告されている。教授学では、目の前の子ども人間形成に寄与するために個々の教師自ら教育内容を適切なもの変えていくことが期待されていたのに対し、カリキュラム研究では心理学や各教科の専門家が教育内容を科学的・専門的に決定することに主眼が置かれているといえる。こうした差異から、アメリカのカリキュラム研究者がドイツの教授学的なアプローチに関心を持ち、交流が行われた。

しかしPISA(2000)での成績不振によって引き起こされたPISAショック以降、ドイツのカリキュラムの決定を正当化する要因としては心理学や経済界が影響力を増し、他方で教授学は後景に退いていった。教授学の衰退に伴い、各学校や教師による自律的なカリキュラム開発は困難なものとなり、一方で各州が教育スタンダードを導入することで結果による教育のコントロールが強化されている。ところで、心理学などの成果は1960年代の西ドイツにおいてすでにアメリカから受容されていたものでもあり、PISA後ドイツのカリキュラム研究の状況は1960年代の研究動向と連続性も有しているともいえる。

上記のように展開してきた西ドイツのカリキュラム研究を検討する。その際に、アメリカカリキュラム研究との関係の中で、西ドイツにおける60、70年代のカリキュラム研究の学説やカリキュラム開発実践を検討する。それによって本研究の主たる問いである「ドイツのカリキュラムがどのように正当化されてきたか」に答えたい。

2. 研究の目的

本研究では、教授学とアメリカのカリキュラム研究に影響を受けているドイツのカリキュラムがどのような根拠をもとに正当化されてきたかという点を明らかにする。その際、まず日本におけるドイツの教育に対する研究状況を確認したい。日本の教育方法学は、ドイツの教授学とアメリカカリキュラム研究双方から影響を受けてきた。一方では海外では、90年代以降の教育研究の国際化の中でドイツの教授学とアメリカカリキュラム研究が交流をすすめ、特にドイツではPISA以降にカリキュラム研究の影響が強まった。しかし、日本の教育方法学ではアメリカとドイツに関するカリキュラム研究は互いに独立して進められてきたため、アメリカのカリキュラム研究との関係の中でドイツのカリキュラム研究を検討するという視点が不十分であった。それによってアメリカに影響を受けてきたドイツのカリキュラムの性格が十分に明らかにされていない。本研究は戦後西ドイツに影響を及ぼしているアメリカカリキュラム研究との関係の中で西ドイツのカリキュラム研究を検討する。こうした検討は、アメリカカリキュラム研究と西ドイツのカリキュラム研究の関係に注目するという点で学術的独自性がある。また、これによって、主にアメリカのカリキュラム研究を受容してきた日本の教育方法学やカリキュラム研究に対して、ドイツ教授学にもとづいた異なる文脈のカリキュラム研究を提示することが可能となるだろう。したがって、本研究では、こうしたアプローチによって、教授学やカリキュラム研究、現代では特に心理学、さらには教師、親、子どもを含めた決定主体のもとで、西ドイツのカリキュラムがどのような根拠をもとに正当化されてきたかを明らかにしたい。

3. 研究の方法

日本では的場正美に代表される、西ドイツのカリキュラム運動が隆盛した60、70年代のカリキュラム研究を扱う研究と、久田敏彦らのドイツ教授学研究会に代表される2000年代のPISAショック後の展開を追う研究に分かれている。しかし、上記の日本の研究では西ドイツ国内での動向に限定されているため、諸外国のカリキュラム研究、特に西ドイツに影響を及ぼしてきたアメリカとの影響関係で西ドイツのカリキュラム研究を検討するという視点に課題がある。一方で英米圏では「教授学、カリキュラム研究に出会う」プロジェクトのように教授学とアメリカカリキュラム研究を二項対立的に論じるものが多く、西ドイツのカリキュラム研究の歴史的展開に対する分析が不十分である。したがって、本研究では戦後西ドイツのカリキュラム研究がどのようにアメリカのカリキュラム研究の影響を受けながら、あるいは受けることなく発展してきたかを検討する。

また、戦後西ドイツのカリキュラム研究を検討するに当たり、カリキュラム開発の担い手にも

注目したい。ドイツ語圏では、PISA ショックによってもたらされた教育スタンダードが戦後西ドイツのカリキュラム研究史とどのような歴史的連続性／断絶を有しているかがキュンツリ (Rudolf Künzli) らによって検討されている。特にキュンツリはアメリカのカリキュラム研究者であるシュワブ (Joseph J. Schwab) のカリキュラム論をもとにしながら、教育スタンダードに対抗して教師の専門性を尊重することに注目した。一方で、本研究は教師や研究者のような専門家のみならず、親、子どもを意思決定主体として捉え、カリキュラムがどのような根拠を持って民主的・政治的に正当化されてきたかという点に注目する。それによって西ドイツにおけるカリキュラム編成を正当化するパラダイムの歴史的変遷を明らかにする。

4. 研究成果

本研究の研究成果として、においては 1920 年代よりドイツのレーアプラン研究の理論的基盤を構築し、現代ドイツのカリキュラム研究にも多大な影響をもたらしている E. ヴェーニガーのレーアプラン理論の意義と課題を明らかにした論文があげられる。ヴェーニガーは 1960 年代以降にアメリカよりカリキュラム研究が輸入される以前の西ドイツのカリキュラム研究の到達点と課題について研究した。その成果は『大阪成蹊大学紀要』に掲載されている。

ヴェーニガーはヴィルヘルム・ディルタイの精神科学 (Geisteswissenschaft) に由来する精神科学的教育学 (Geisteswissenschaftliche Paedagogik) を代表する人物である。ヴェーニガーはディルタイの普遍妥当的教育学への批判を援用しながら、レーアプランにおける内容決定の普遍妥当性を批判している。さらにヴェーニガーは国家、学問、教会などの学校外のアクターや、教師・生徒間における、教育内容に関する対立をレーアプランの中に見出し、教授学の分析の俎上に置く。こうしたヴェーニガーのレーアプラン理論について、レーアプランが国家や学問、教師や生徒の対立のなかで紆余曲折を経つつ、国家に統制されながら生じていくとした彼の主張を、その理論的基盤とともに解明した。

日本におけるヴェーニガーに関する先行研究は、彼自身が教育学、教科教育研究、軍隊教育学など幅広い分野で研究を行ってきたため、多くの領域で確認できる。しかし、彼のレーアプラン理論に限って先行研究を述べるならば、ヴェーニガーのレーアプラン論の内容を取り上げる研究はいくつかなされてきたものの、内容の紹介にとどまり、彼がどのような論拠にもとづいてレーアプランを正当化しているかというその深奥まで検討することができていなかった。そのため、本研究ではディルタイにさかのぼりながらヴェーニガーが精神科学的教育学の成果をレーアプラン研究とどのように結びつけているかを検討した。日本においては外国の理論を表面的に輸入し、紹介する傾向にあるが、本研究ではその研究が根差す学問の基礎付けにさかのぼって検討を行った。それによって戦後西ドイツのカリキュラム研究の出発点としてのヴェーニガーを日本において正当に位置づけることができた。今後はヴェーニガー以降に続く 60, 70 年代のカリキュラム研究の系譜を連続性／非連続性に注目しながら検討していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 市川和也	4. 巻 8
2. 論文標題 E. ヴェーニガーのレーアブラン理論に関する検討 レーアブラン理論の理論的基盤に焦点を当てて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪成蹊大学紀要	6. 最初と最後の頁 153-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------